

真正な知覚的経験と神経活動

横山幹子*

Veridical Perceptual Experiences and Neural Activity

Mikiko YOKOYAMA

抄録

知覚についての日常的な考えによれば、われわれの知覚的経験は心から独立した対象についてのものであり、われわれはその対象に直接気づくことができる。そして、それらの対象は心に現前している。しかし、多くの哲学者は、このような知覚についての日常的な考えは、知覚的間違いの可能性のために偽でなければならないと論じてきた（知覚の問題）。表象説（志向説）や選言説はこの問題に答えようとするものである。その問題に答えるためには、それらは、ある種の現象的特徴を持つ真正な知覚的経験が生じていることと脳内のある領域の活動とが密接に結びついているという考えをも説明しなければならない。Fish は、『知覚・幻覚・錯覚』の中で、選言説がその考えを説明できると論じている。本論文では、Fish の真正な知覚的経験に焦点を当てた議論が妥当かどうかを検討する。そして、知覚についての日常的な考えを重視するなら、選言説が表象説より優れているとは言えないと論じる。

Abstract

According to the everyday conception of perception, our perceptual experiences are of mind independent objects, we can be directly aware of the objects and those objects present to the mind. But many philosophers have been arguing that this everyday conception of perception must be false because of the possibility of perceptual errors (the problem of perception). Both representationalism (the intentionalist theory) and disjunctivism are responses to this problem. In order to offer a response to the problem, these theories must also explicate the idea that the instantiation by veridical perceptual experiences of a certain kind of phenomenal property closely correlates with a certain type of activity in certain areas of the brain. Fish claims in "Perception, Hallucination, and Illusion" that disjunctivism can explicate the idea. The article examines whether Fish's argument that focuses veridical perceptual experiences is reasonable and claims that if man places importance on the everyday conception of perception, disjunctivism is not necessarily superior to representationalism.

* 筑波大学図書館情報メディア系
Faculty of Library, Information and Media Science
University of Tsukuba

1. はじめに

われわれは、日常、知覚の対象は心から独立した外的な対象であり、自分たちはそれらの対象に直接気づくことができると考えている。たとえば、私がタマという猫を知覚しているなら、その知覚の対象は、外界にある猫タマであり、私は猫タマに直接気づいている、と考えている。このような知覚についてのわれわれの日常的な考えを維持することを議論の前提とした場合、知覚についてどのような説明を与えることが適切なのだろうか。

その問いに答えを与えるために解決されなければならない問題の一つは、Ayerの「錯覚からの議論」の指摘¹にみられるような問題にどう対処するかということである。つまり、「知覚についてのわれわれの日常的な考えと、錯覚や幻覚のような知覚的間違いの存在を認めることとの矛盾」をどのようにして解決するかということである。そして、この問題に対処する知覚の理論として提案されているものの一つが、真正な知覚的経験と幻覚的経験の間に共通要素を認めないという、選言説である。選言説の採用により、日常的な考えと知覚的間違いが存在することの間の矛盾をどのように解決することができるかについては、Putnam²やMartin³、Fish⁴らによって、多くのことが論じられてきた。

私自身も「選言主義における否定的認識論について」⁵等の論文で、表象説（志向説）との比較も考慮しながら⁶、幻覚的経験と真正な知覚的経験が質的に同じであることを根拠に知覚についての日常的な考えは間違っているとする非選言説論者の主張に焦点を当て、選言説はそれらの区別不可能性を認めたくえで両者を異なる種類のものとして扱えるのかを考察するという視点で、その問題について検討してきた。また、「『幻覚からの議論』：拡張段階と局所的付随性の原則」⁷において、幻覚の場合と真正な知覚の場合に脳内の神経活動が共有されるということを根拠に知覚についての日常的な考えは間違っていると論じる論拠の適切さを、Fishの議論を検討することによって考察した。しかし、そこでは、幻覚の発生に直接かかわる論拠を主に検討し、真正な知覚の場合に対応する脳内の神経活動の存在をめぐる議論については扱わなかった。

本論では、真正な知覚的経験と脳内の神経活動との関係に焦点を当て、「脳内の神経活動が知覚と結びついている」という考えと選言説の関わりを検討することによって、知覚についてのわれわれの日常的な考えを維持することができる知覚の理論として選言説が適切かどうかを考察することを目的としている。

その目的のために、まず、知覚についてのわれわれの日常的な考えを簡単に確認する。そして、「知覚についてのわれわれの日常的な考えと、錯覚や幻覚のような知覚的間違いの存在を認めることの矛盾」に対処する知覚の理論の候補としての、選言説と表象説について概観する。その後、脳内の神経活動と知覚についてどのような考えが一般的であるかを確認する。そのうえで、そのような考えを、表象説と選言説がそれぞれどのように説明しうるのであるかを見る。特に、選言説は、真正な知覚的経験と幻覚的経験の間に共通要素を認めないため、脳内の神経活動と知覚の密接な結びつきを認めることと矛盾するように見える。そのため、Fishが“Perception, Hallucination, and Illusion”⁸で論じている議論を手掛かりに、選言説が、脳内の神経活動と知覚との関係を認めることと矛盾するのか、どう考えたら矛盾しないのか、どのような問題点があるのかについて論じる。そしてそのことを通じて、知覚についてのわれわれの日常的な考えを維持することができる知覚の理論として選言説が適切かどうかについて考察する⁹。

2. 矛盾の存在

2.1 知覚についてのわれわれの日常的な考え

Stanford Encyclopedia of Philosophyの“The Problem of Perception”の項¹⁰では、知覚についての日常的な考えを形成するものとして二つの要素を挙げている。一つは、「開かれていること (Openness)」であり、もう一つは、「気づいていること (Awareness)」である。

「開かれていること」は、世界に対して開かれているということの意味し、二つの要素から構成される。一つ目は、「心から独立していること (Mind-Independence)」である。われわれの知覚的経験にはわれわれの心から独立した対象が現れていると考えているというのである。二つ目は、「現前していること (Presence)」である。われわれの知覚的経験の特徴は、日常的な対象が本来持っている特徴を現している。教会の庭を覆っている雪を見ているとき、われわれの心から独立した対象である雪が、われわれの心に現れているのであり、そのような知覚的経験の特徴は、雪が本来持っている特徴を現している。

もう一つの要素である「気づいていること」とは、知覚的経験は、われわれに日常的な心から独立した対象についての知覚的な気づきを与えるということである。われわれは、ときに間違えることがあるとしても、心から独立した対象に気づくことができる。

上記のことを参考にするならば、われわれの知覚的経

験は、われわれの心から独立した対象についてのものであり、たとえ例外的に知覚的間違いが存在するとしても、たいていの場合、われわれの心とは独立に外界に存在する対象（物理的対象）に気づくことができるという考えが、知覚についてのわれわれの日常的な考えだととらえることができる。

2.2 知覚的間違いの存在を認めることとの矛盾

2.1で述べたような「知覚についてのわれわれの日常的な考え」は、知覚的間違いの存在を認めることと矛盾すると、Ayer 以来さまざまな形で論じられている。Ayer によれば、水に差し入れられると屈折する棒の例で見られるように、錯覚が存在する。しかし、そのときでもわれわれは何かを知覚している。だとしたら、それは心から独立した外的な対象ではない。けれども、錯覚の際に見えている曲がった棒の経験は、曲がった棒の真正な知覚的経験の場合と質的に同じである。したがって、真正な知覚的経験の場合も、知覚の対象は心から独立した外的な対象ではない。

知覚的間違いの代表的なものと考えられるのが、錯覚と幻覚である。錯覚とは、現実中存在する対象が現実とは違うように知覚されることであり、幻覚とは、現実には存在しない対象が存在するかのように知覚されることである。矛盾が錯覚について論じられるなら、「錯覚からの議論」と呼ばれるし、矛盾が幻覚について論じられるなら「幻覚からの議論」と呼ばれる。両者は、矛盾を導き出すことに関しては、基本的には似た構造を持っているので、ここでは「錯覚からの議論」だけを示す。

Stanford Encyclopedia of Philosophy の“The Problem of Perception”の項の整理に従えば、「錯覚からの議論」の基本的な考え方は、

- A. 錯覚的経験においては、人は日常的な対象に気づいていない。
- B. 真正な知覚的経験に対しても錯覚的経験に対しても、経験についての同じ説明が適用されなければならない。
- C. それゆえ、人は決して知覚的には日常的な対象に気づいていない。¹¹

というものである。なぜ同じ説明が適用されなければならないかの議論はさまざまである。Snowdon¹²は、その議論を、われわれの知覚についての日常的な考えが錯覚の場合に偽であることを示す「土台」の部分と、その考えが真正なものを含むすべての場合に偽であるこ

とを示す「拡張部分」に分けて論じている。たとえば、Snowdon に倣った Fish¹³は、拡張段階について、錯覚の場合素朴実在論は偽であるというこの考えは、真正な知覚的経験と錯覚的知覚的経験の経験的連続性のために、真正な知覚を含むすべての場合に拡張されると述べている。異なる視点からは同じものでも様々な形をとって見えるので、錯覚の場合と錯覚でない場合の違いは程度の問題だと考えられているというのである。

3. 選言説

2で述べたような矛盾を解決できるような知覚についての理論の一つとして提案されているのが、選言説である。選言説は、Hinton¹⁴によって始められたと言われる。その考えでは、真正な知覚的経験を心から独立した対象についてのものだと考え、真正な知覚的経験と幻覚的経験や錯覚的経験が共有する共通要素を認めない。この「共通要素の否定」ということが、選言説の要点である。そして、「共通要素」を認めないことにより、選言説は、先の矛盾を以下のように解決できる。

たとえ真正な知覚的経験と幻覚的経験が主観的に区別できないとしても、真正な知覚的経験と幻覚的経験に共通する本質的な要素があるとは考える必要はない。それを単なる二つの陳述の短縮形だと考えることができる。たとえば、「私はその本を見た」という陳述を、「私はその本を実際に見たか、私はその本を見たかのように見えたかのどちらかである」という選言の短縮形だと考えることができる。その陳述は、二つの陳述の選言にすぎないのであり、それらに共通要素によって真であるとされる必要も、真正な知覚的経験と幻覚的経験に同じ説明が適用される必要もない。両者に含まれている経験は根本的に違う種類に属しうる。したがって、知覚的な間違いを認めたからといって、われわれの知覚についての日常的な考えを否定し、われわれが日常的な対象に気づいていないとする必要はない。

たとえば、Martin は、選言説とは、「人の経験は、人を心から独立した世界に関係させるが、それは非表象的なやり方である」¹⁵と考えるものであるとしている。つまり、経験を心から独立した対象についてのものだと考えるが、経験が心から独立した対象についてのものであるのは、経験が心から独立した対象を表象しているからではないと考えるものであるとしている。その考えによれば、真正な知覚的経験と幻覚的経験が内省的に区別できないとしても、真正な知覚と知覚的間違いが持つ共通要素があるわけではない。そうではなく、両者に含まれ

ている経験は根本的に違う種類に属していると考えるのである。

また、Fishは「選言説の背後にある中心的な考えは、真正な知覚の場合に含まれる心的状態は、区別不可能な幻覚に含まれるものとは全く異なる種類であるということ、もしくは、真正な知覚とそれと区別不可能な幻覚の両方の場合に共通ないかなる心的状態もないということである」¹⁶と述べている。

4. 表象説

表象説は、真正な知覚的経験と幻覚的経験が主観的に区別できないのは、真正な知覚的経験と幻覚的経験に共通する本質的な要素があるからだと考え。そして、知覚的間違いを誤表象として扱う。ここでは、Fishの“Philosophy of Perception: A Contemporary Introduction”¹⁷での説明を参考に、表象説について概観したい。

Fishは、知覚についての理論を整理する三つの原理として、共通要素原理、現象原理、表象原理を挙げている。共通要素原理とは、先に述べたように、真正な知覚的経験と錯覚的経験や幻覚的経験が区別できないのであれば、それは同じ心的状態を持つと考えられるものである。現象原理とは、Robinsonの定式化によれば、「ある特定の感覚質を所有している何かが主体に感覚的に現れているならば、そのときは、その主体が、それについて、その感覚質をまさに所有していると気づいている何らかのものがある」¹⁸という原理である。トマトがない場合にも、トマトがあるという感覚質を所有している何らかのものがあるというのである。表象原理とは、経験が表象的だという考えである。たとえば、視覚的経験に関して言うならば、トマトの視覚的経験は、トマトについてのものである。この「について」のものであるという特徴が、「表象的である」という特徴である。視覚的経験は、世界のある特定のあり方を表象している。そして表象が伝えているもの、世界の特定のあり方が表象の内容である。ただし、表象は、世界の特定のあり方について誤って伝えることがある。それが、誤表象である。

では、この三つの原理を使うと、表象説¹⁹はどのように説明されるのだろうか。表象説は、知覚的経験が表象内容を持っていること、それが世界のあり方を表象していることを認めている。表象内容は、志向的内容とも呼ばれる。つまり、表象原理を認めているのである。また、表象説は、共通要素原理も認めている。知覚も幻覚も同じ表象内容を持ちうる。ある経験を持つとはどのような

ことかという現象的特徴が変化するのは、表象内容が変化するときに限るとする強い表象説もあれば、それを認めない弱い表象説もある。さらに、表象説は、現象原理を認めない。それは、現象原理を認めている知覚のセンスデータ説と区別するとわかりやすい。センスデータ説によれば、幻覚の場合も、われわれが気づいているものがある。それは、外的世界には存在しない。気づかれているのはセンスデータであるとするのである。そのようなセンスデータ説に対して、表象説は、気づかれている何らかの実在を仮定しない。以上のように見てくれば、表象説の要点は、表象原理を認めるところにあるのである。

ここで注意しなければならないのは、経験の志向的対象の特徴と経験それ自体の特徴を区別することである。Harmanは、「表象された対象の性質とその対象の表象の性質を区別することが非常に重要である」²⁰と述べている。この考えによれば、リンゴの赤さは経験の性質ではなく、リンゴの表面の性質である。そして、そのように考えるならば、真正な知覚的経験が心から独立した対象についてのものであると考えることができる一方で、知覚的誤りの場合を、誤表象として理解することができるのである。そのようにして、表象説も「錯覚からの議論」や「幻覚からの議論」に答えることができるのである。

5. 脳内の神経活動

脳の状態とわれわれの知覚的経験、知覚の際にわれわれが持つ現象的特徴との間に関係があるということは、現代のわれわれの知覚についての日常的な考えの一部であるように思える。雑誌やテレビ、その他のメディアでは、娯楽的要素を含んだ特集の場合も、「脳の・・・の場所が・・・の知覚と関係しています」という表現は頻繁に使われている。われわれの知覚的経験、もしくは、もっと広い意味での、われわれの意識が脳と密接に関係しているのだというわれわれの考えは、病院に行けば簡単にCTやMRI等で、脳内の様子を調べてもらえることから生じている。そのように、脳の状態がわれわれの知覚経験と密接に関係しているという考えは、脳科学や心理学の専門家ではない一般の人々においても、当たり前のこととして受け入れられているのである。

脳内の神経活動と知覚的経験との関係について、専門家ではない人々にもわかるようになり簡単に書かれている『イラストレクチャー 認知神経科学：心理学と脳科学が解く心の仕組み』²¹では、「認知神経科学 (cognitive neuroscience)」という言葉は、「生活体の認知活動を脳

の神経細胞集団の生物学的過程に基づいて理解する、平たくいえば人間のこころのありようを脳・神経の言葉遣いで語る、という学問分野²²を表すと述べられている。そして、そこでは、脳内の状態を知るための様々な方法、特殊な放射性同位体を投与し、その物質の脳組織中の濃度の時間的変化を観測する PET（陽電子放出断層撮影）や磁気共鳴で脳活動を可視化する fMRI（機能的磁気共鳴画像法）などの脳内の状態を知るためのさまざまな方法が開発されてきたことを紹介したうえで、「視覚の場合には外界から網膜に投影された光エネルギーを電気信号に変換し、網膜から大脳の高次資格皮質までの神経系の処理によって構築された知覚世界を体験しているのである」²³と述べられている。

また、日本認知科学会編の『認知科学辞典』の「知覚」の項では、「外界の物理的的刺激を感覚器で受容し、中枢神経系で処理された結果、意識にのぼる過程 (perception) または意識される内容 (percept) を指す。視覚を例にとると、網膜の光受容細胞で受容された視覚情報は、外側膝状体を経て、大脳皮質へ至る。大脳皮質における情報処理の結果、眼前にある世界を意識体験する過程が知覚過程でありその内容が知覚である」²⁴と書かれている。

このような考えを背景として、意識の神経相関項 NCC (neural correlates of consciousness) を探す研究も行われている。たとえば、Koch は、“The Quest for Consciousness: A Neurobiological Approach” の用語集の “Consciousness” の項で、「戦略的な理由のために、私は、意識な感覚知覚のために十分な脳状態、意識の神経相関項、NCC に注目している」²⁵と書いている。

脳と知覚に相関関係があると考え、脳のニューロンのどこの活動と知覚が関係しているかについての考察は、実際に多くなされている。たとえば、哲学においてよく言及される、脳の内側側頭部 (MT) へのダメージを持つ患者が運動を知覚する能力を失うということに関連した研究については、『新編 感覚・知覚 心理学ハンドブック』にも記載されており、それをも含めてまとめる形で、「MT 野細胞が運動方向選択性を持ち、最適運動方向が MT 野微小領域に表出されていることから、一般に、MT 野ではパターンの動きが分析されていると考えられている」²⁶と書かれている。

以上のように、われわれは、日常的に、脳内の神経活動と知覚的経験に密接な関係があると考えているのである。

6. 脳内の神経活動と表象説

脳内の神経活動と知覚的経験との密接な関係を認めることは、表象説と親和性が高いように思える。たとえば、『認知科学辞典』では、「知覚内容」や「表象説」という項がある。しかし、「選言説」の項も、「知覚のセンスデータ説」の項もない。そのことは、認知科学的に知覚を考える際に、表象説が、知覚内容の説明理論の候補となりうるほど、脳内の神経活動を認めることと表象説の親和性が高いことを示している。

『認知科学辞典』の「知覚内容」の項では、「我々の知覚経験が持つ志向内容のこと、色の経験（例えば日没の空を眺めること）を例にとると、移り変わる様々な色調すべてに対応する概念を我々はもっているわけではないが、この知覚経験には、確かに世界の特徴を表象する内容がある」²⁷と書かれているし、「表象説」の項では、「知覚とは、心の中の対象の表現機能を通じて、心の外の事物を知る経験であるとする立場。心の中の対象は観念や印象などと呼ばれる。例えば、心の中の赤の印象は、心の外の特定波長の電磁波の実在を表現している」²⁸と書かれているのである。また、『イラストレクチャー 認知神経科学：心理学と脳科学が解くこころの仕組み』では、「視覚の場合には外界から網膜に投影された光エネルギーを電気信号に変換し、網膜から大脳の高次視覚皮質までの神経系の処理によって構築された知覚世界を体験しているのである。つまり、外界からの感覚入力によって処理させ、知覚表象が作られる。この過程の結果として私たちに意識されるものを知覚と呼ぶ」²⁹と書かれている。

脳内の神経活動が知覚過程であるとするならば、その知覚過程が表象内容であり、知覚内容だと考えることができる。表象説論者も、「表象とは何なのか」という問題に対して、脳内の神経活動を持ちだすことができる。

たとえば、Koch は、「意識の内容 (contents of consciousness)」について「意識の流れの一部を形成している、一瞬ごとの、特定の意識的な知覚もしくは記憶のこと。（『赤いリング』を見ている場合のように）。ある特定の NCC は、その特定の内容にとって十分である」³⁰と述べている。「赤いリング」を見ているという意識の内容に対応した特定の NCC があることを、「赤いリング」を表象している状態であると考えればよいのである。

そして、Koch が目指しているように、NCC が発見されるならば、それによって表象概念を説明できるかもしれない。「赤いリング」を表象しているのは、そのような脳状態にあるときだと考えることもできるかもしれない

い³¹。もちろん、ニューロン同士の集団としての活動形態が問題になっているのであり、それは、「この脳の活動が活発であることが、赤いリングを表象しているということですよ」というような単純なことではないだろう。しかし、脳の集団としての活動形態を考えることによって、NCCを探そうという動きもあるのである。そのように、脳内の神経活動と知覚的経験の密接な関係を認めることは、表象説にとっては、それほど難しい問題ではない。

7. 脳内の神経活動と選言説

脳内の神経活動とわれわれの知覚に密接な関係があるということ、選言説はどのようにとらえることができるのだろうか。一見したところ、「脳内の神経活動がわれわれの知覚的経験を決定する」という考えは、選言説と相いれないように思える。なぜなら、選言説は、「知覚についてのわれわれの日常的な考えと知覚的間違いの存在を認めることとの矛盾」を、それらの間の「共通要素」を否定することにより解決しようとしていたからである。もし脳内の神経活動がわれわれの知覚的経験を決定するならば、それこそが、「共通要素」になるのではないか。「共通要素」を否定する選言説は、脳内の神経活動こそが真正な知覚的経験の場合もそうでない知覚的経験の場合にも共有され、それらの現象的特徴を決定づける「共通要素」だと考えることなしに、脳内の神経活動とわれわれの知覚に密接な関係があるということを説明しなければならない。

Fish は、“Perception, Hallucination, and Illusion”の中で、「幻覚的経験の発生を説明するためには、幻覚的経験の現象的特徴を決定づけているのが脳内の神経活動でなければならない、それが、真正な知覚的経験の現象的特徴をも決定づけている」という議論³²の問題点を指摘した後で、「そもそも真正な知覚的経験の場合も脳内の神経活動によって決定されていると言えるのではないか」という問題について論じている。脳内の神経活動と選言説の関わりという問題を解く手掛かりとして、ここでは、Fish がどのように議論しているのかを概観したい。

Fish は、Maund が「主張されていることは、そのような可能性が存在すると主張するよい理論的な理由があるということである。これらの理論的な理由は、脳について知られていることや、われわれが持つ、知覚を獲得したり使ったりする純粋な能力において脳が果たす役割について知られていることに依存している」³³と言って

いることを引用し、そこに見て取れるのは、脳で生じる視覚的処理の種類と真正な視覚的経験の現象的側面の間に平行関係があるということに注意を引くことによって、脳内の神経活動が真正な知覚的経験を生み出すと主張する立場であると述べている。

ここで取り上げられているのは、脳内の神経活動が幻覚的経験を生み出すということではなく、脳内の神経活動が真正な知覚的経験を生み出す証拠があるという考えである。では、その証拠とは何なのだろうか。Fish によれば、その証拠として挙げられているのは、ある種の真正な知覚的経験を持つためには、脳の特定の領域が活動していなければならないということである。したがって、それが証拠になるかどうかが問題となる。

Fish は、ある種の真正な知覚的経験を持つためには脳の特定の領域が活動していなければならないことを示す例として、Zeki の主張を挙げている。たとえば、Zeki³⁴が、後頭葉や側頭葉の腹側面の損傷を持つ患者が色を知覚する能力を失うということや脳の内側側頭部(MT)へのダメージを持つ患者が運動を知覚する能力を失うことを述べていることがその例になる。そして、意識の神経相関項(NCC)を見つけようとする動きがあることも認めるのである³⁵。Fish は、そのような指摘が、ある種の真正な知覚的経験を持つためには脳の特定の領域が活動していなければならないことを示唆しているということを認める。つまり、脳内の神経活動が真正な知覚的経験の必要条件であることは、認めるのである。彼が反対するのは、関係があるということが、脳内の神経活動が真正な知覚的経験の十分条件であることを示しているということである。

必要性が正しいということから十分性が正しいということは、最上の説明への推論によって述べられうる。脳内の神経活動が知覚的経験の十分条件であるとしたら、脳内の神経活動と真正な知覚的経験の相関関係をよりよく説明できるというのである。Fish が十分性を否定するためには、異なる種類の最上の説明を与えなければならない。

そこで、Fish は、Robinson の二つの説明の区別³⁶を使う。それは、選択的説明と発生的説明の区別である。発生的説明では、脳内の神経活動は、真正な知覚的経験の現象的特徴を生み出すものである。選択的説明では、脳内の神経活動は、外にある刺激と関係させるものである。Fish は言っている。「このように、われわれは、なぜある神経活動が、同時にある現象的性質を持つ経験にとっての十分条件でもあると想定することなしに、必要条件であるのかについての適切な説明を概観することができ

る。』³⁷ 選択的説明によれば、脳の神経活動は、私が、たとえば、「世界にある赤の例」に気づくことを可能にする条件だと考えることができる。「経験における脳の役割のこのような考え方は、脳を何らかの仕方で意識的経験を生み出す器官と見なすのではなく、むしろ、われわれがその中で生活する世界の様々な特徴をわれわれに気づかせる器官と見なす。』³⁸

そのように、脳はわれわれの知覚システムの一つの構成要素と考えられる。そして、そのような選択的説明でも、脳のある部分に損傷をもつ人が、ある種の知覚的経験を持つことができないということを説明することができる。その人は、器官の損傷のために、色についての情報を適切に処理できていないのである。

そのうえ、Fishによれば、発生的説明は、選択的説明ならば説明する必要がないことも説明しなければならない。発生的説明では、たとえば、色の知覚を生み出す能力は、形や動きなどを生み出す能力と別々に生じることになる。だとすると、健常者の場合、それらはどのように統合されるかが問題になるというのである。つまり、脳の機能が現象的特徴を伴う経験を生み出すとするならば、われわれは、その問題にこたえなければならないが、選択的説明を取るならばその問題を扱う必要はないというのである。

そのように、Fishによれば、脳内の神経活動とわれわれの知覚に密接な関係があることを認めたとしても、そのことは、「共通要素」があることを認めることにはならず、それは、選言説と矛盾しないのである。

8. 考察

これまで、「知覚についてのわれわれの日常的な考えを維持することができる知覚の理論として選言説が適切かどうか」という問題を考察する一助として、知覚についてのわれわれの日常的な考えの一部でありながら、選言説とは矛盾するように思える「脳内の神経活動と知覚的経験との密接な結びつき」を選言説は説明することができるのかを明らかにすることを目指して議論してきた。そして、矛盾に見えるものは実際には矛盾ではないと主張するFishの議論が、どのようなものであるかを確認した。

もし選言説が「脳内の神経活動と知覚的経験との密接な結びつき」をうまく説明できなかつたら、それをうまく説明することができる表象説の方が、知覚についてのわれわれの日常的な考えを維持することのできる知覚の理論としてよりふさわしいものであると考えることは

否定されないだろう。それゆえ、ここでの問題は、まず、第一に、Fishの議論で、本当に選言説と「脳内の神経活動と知覚的経験との密接な結びつき」が矛盾すると思えなくともすむかということをはっきりとすることである。

また、Fishは、「脳内の神経活動と知覚的経験との密接な結びつき」についての自分の説明の方が、脳内の神経活動が知覚的経験を享受するための必要十分条件であると考えられる説明よりも利点があるとも言っていた。それゆえ、もう一つの問題は、本当にFishの説明の方が、利点があるのかを検討することである。

さらに、その考察は、「知覚についてのわれわれの日常的な考え」についての再考を必要とするかもしれない。本章の最後に、その点についても述べたい。

まず、Fishの言うように、発生的説明と選択的説明を分けることによって選言説と「脳内の神経活動と知覚的経験との密接な結びつき」との一見した矛盾を解くことができるのかについてみてみたい。

Fishによれば、脳内の神経活動と知覚的経験との密接な結びつきを認めたとしても、脳内の神経活動こそが、真正な知覚的経験の場合も、そうでない知覚的経験の場合にも共有され、それらの現象的特徴を決定づける「共通要素」だと考える必要はない。彼によれば、共通要素があることの証拠として挙げられているのは、ある種の真正な知覚的経験を持つためには、脳の特定の領域が活動していなければならないということであった。しかし、彼は、ある種の真正な知覚的経験を持つために脳の特定の領域が活動していなければならないとしても、そのことは、真正な知覚的経験の場合と、そうでない知覚的経験の場合に共有される「共通要素」がある証拠にはならないと言っていた。そのために彼が使っていたのが、発生的説明と選択的説明の区別だった。

Fishによれば、さまざまな実験結果が示しているものは、ある種の真正な知覚的経験を持つために脳の特定の領域が活動していなければならないということ、つまり、脳内の特定の領域の活動が知覚的経験の必要条件であるということだけであり、それが十分条件にもなるためには、脳内の神経活動は真正な知覚的経験の現象的特徴を生み出すという発生的説明がなされなければならない。しかし、その発生的説明をなぜとるかの説明は、最上の説明であるというものだけだった。けれども、同じことは、脳内の神経活動は外にある刺激と関係させるものであるという選択的説明をとっても説明できた。それゆえ、選択的説明を取るならば、脳内の神経活動が知覚的経験を享受するための必要十分条件であると考え

必要はないというのだった。

ここでの問題は、選択的説明でも本当に、ある種の真正な知覚的経験を持つために脳の特定の領域が活動していなければならないということを説明できるかということである。私はこれには問題がないと考える。朝食を食べることと子供の成績の間に相関関係があるからといって、朝食を食べることが子どもの成績を決めるわけではない。相関関係があるということだけでは、脳内の神経活動だけで真正な知覚的経験の現象的特徴を生み出すとは言えない。脳内の神経活動だけで真正な知覚的経験の現象的特徴を生み出すということが想定可能だということは、その可能性があるということを示すだけであり、それが唯一の可能性だということまでは示していない。

しかし、ここで言われていることは、発生的説明でも選択的説明でも、状況を説明できるということだけである。それは、選択的説明をとるべき理由にはならない。それゆえ、Fish は、発生的説明は、選択的説明ならば説明する必要がないことも説明しなければならないとして、選択的説明を取る方がよいと論じていたのであった。発生的説明では、たとえば、色の知覚を生み出す能力は、形や動きなどを生み出す能力と別々に生じることになるが、それをどう統合するのかの問題を解決しなければならないと主張していた。

けれども、本当に、そのことは、選択的説明を取る方がよいということを示しているのだろうか。私はそうは考えない。それぞれの知覚をどのように統合するのかの問題があることが本当に問題になるのは、この場合、脳神経科学や認知心理学の分野で、その問題を扱う手段がない場合に限る。その問題を扱う方法がどのようなものか見当もつかないのであれば、それは問題だろう。しかし、もし、どのように統合するのかの問題が、それらの分野で検討され、何らかの成果が出ているとしたら、統合問題を解決しなければならないということは、欠点にはならない。入試に合格するためにはどのような試験勉強が適切かという問題が解かれなければならない問題としてあるとしても、入試があることが問題であり、入試をなくしたほうがよいという結論にはならない。解くべき問題があるから、その問題を解く必要のない方を選ぶというのは、常には正しいとは言えない。そのうえ、統合問題を検討することによって、知覚的経験について新たな知見が得られるかもしれない。そして、具体的に得られた知見は、医療等の分野で役に立つかもしれない。

実際、それぞれの性質がどのように統合されるのかという問題は、心理学においてもなされている。たとえば、「形と色の統合における局所結合の働き」³⁹では、形、色、

運動、奥行きなどの属性ごとに別々のモジュールで処理しているのに、私たちが知覚しているのは色々な性質を併せ持つ物体であることをどのように説明するのかについて、特徴統合理論にしたがって、一つの考察がなされている。そこでは、形属性と色属性が結合されるとき、形の単純特徴がどこまで統合された段階で属性間の結合がなされるのかについて、実験結果を参考に、局所結合モデル（形の単純特徴と色特徴が直接結合、色特徴と結合した形特徴同士が結合されて全体の形が知覚される）と全体結合モデル（まず形の単純特徴同士が統合されて全体の形が構成され、この全体の形と色特徴とが結合される）のどちらが適切かについて検討されている。そのように、認知心理学の分野で、属性同士がどのように統合されるかの議論があり、認知心理学の内部で、その問題に関して、実験を通して答えようとする研究があるのである⁴⁰。

さらに、選択的説明を取ったとしても、発生的説明では説明する必要のないものを説明する必要が生じる。脳内の神経活動は外にある刺激と関係させるものであると考えとしても、その外にある刺激との関係のさせ方について、具体的にどのように働くのかを説明しなければならない。統合問題を検討することよりも外にある刺激とどのように関連付けられているのか、外にある刺激も知覚的経験の一部であるとするならば、どのようにして知覚的経験の一部を形成しているのかが説明されなければならないのである。そして、それに関しては、Fish も、そのような説明が必要だということを知っている。そうだとすれば、いずれにしても、説明されるべきものがあるという点では、同じであり、発生的説明の場合は統合問題を解かなければならないという、それだけの理由で、発生的説明よりも選択的説明の方が優れていると言うことはできないのである。

ここまでで明らかになったことは、以下の二点である。一つは、「脳内の神経活動と知覚的経験との密接な結びつき」と選言説との一見した矛盾は解くことができるということ、Fish の議論は受け入れることができるということ、つまり、表象説とは違って選言説は「脳内の神経活動と知覚的経験との密接な結びつき」を認めることができないとは言えないことである。もう一つは、Fish の議論にもかかわらず、選言説の説明の方が、より適切であるという根拠は与えられていないことである。

ここで、一つ疑問が生じる。「脳内の神経活動と知覚的経験との密接な結びつき」を認めることは、第二章で述べた「知覚についてのわれわれの日常的な考え」に変化をもたらすのではないかという疑問である。知覚につ

いてのわれわれの日常的な考えとして、第二章では、「知覚についてのわれわれの日常的な考え」は、われわれの知覚的経験には、われわれの心から独立した対象が現れており、その現れはその対象が本来持っている特徴を現しており、われわれは、ときに間違えることがあるとしても、心から独立した対象に気づくことができるというものであるとしていた。しかし、そもそも「脳内の神経活動と知覚的経験との密接な結びつき」を考えた場合、発生的説明をとるにせよ、選択的説明を取るにせよ、知覚的経験に現れているのは本当にその対象が本来持っている特徴を現しているということができるのだろうか。認知神経科学や認知心理学的に考えるならば、「知覚は、脳が情報処理の結果生み出したものであり、外界世界の単なるレプリカではない、それは、例えば、光情報を受けているのが網膜の一平面上に並んだ光感受性細胞であるにもかかわらず、明確な立体感を伴って世界を見ることから明らかである」⁴¹という考えになる。この考えは、確かに知覚経験にはわれわれの心から独立した対象が現れており、心から独立した対象に気づいているということとは矛盾しない。けれども、それは、その現れはその対象が本来持っている特徴を現しているということと矛盾するのではないか。そもそも「その対象が本来持っている特徴」というのは何なのか。そのような疑問が生じるのである。

われわれは、われわれの身体構造や脳のシステムに依存する形で外界を認識していることを、日常において認めている。たとえば、めまいが起きたとき、「そのめまいは、われわれの身体が空間の中でどのように動いているかを知るための器官である三半規管に耳石が入り込むことによって、入り込んだ耳石がちょっとした動きで三半規管を過剰に刺激することによって起きているのですよ」と医師に説明されるなら、われわれは、三半規管に入り込んだ耳石のために、自分が外界を正常に認識できなくなっているのだと納得する。

だとしたら、「知覚的経験に現れているのはその対象が本来持っている特徴である」ということは何を意味しているのだろうか。それは、われわれの身体構造や脳のシステムに依存する形で認識されているとしても、それは、外界の刺激によるものであり、われわれの身体構造や脳のシステムが正常に動いているならばわれわれの知覚的経験となるものが、われわれの真正な知覚的経験なのだということを含んでいる。つまり、日常的には、われわれは、脳が情報処理の結果生み出したものが、われわれにとってその対象が本来持っている特徴であると考えているのである。

もしそれが「知覚についてのわれわれの日常的な考え」であり、選言説が「知覚についてのわれわれの日常的な考え」をうまく説明することを目指すならば、選言説は、「脳が情報処理の結果生み出したものが、その対象が本来持っている特徴である」という考えをうまく説明できなければならない。

知覚についてのわれわれの日常的な考えの一部でありながら、選言説とは矛盾するように思える「脳内の神経活動と知覚的経験との密接な結びつき」を選言説で説明するには、「共通要素」を仮定する必要がないということを示す一方で、脳が正常な情報処理の結果生み出したものが、われわれにとってその対象が本来持っている特徴であるということ「共通要素」を仮定することなく説明することができるかどうかを示さなければならない。それができるかどうかの考察が今後の課題である。

9. おわりに

本論では、Fish の議論を参考にしながら、真正な知覚的経験と脳内の神経活動との関係に焦点を当て、「脳内の神経活動が知覚と結びついている」という考えと選言説の関わりを検討した。そして、そのことによって、選言説が、「知覚についてのわれわれの日常的な考え」を維持する知覚の理論として適切かどうかについて考察してきた。その結果、「脳内の神経活動と知覚的経験との密接な結びつき」と選言説との一見した矛盾は解くことができるという Fish の議論は受け入れることができるということ、Fish の議論にもかかわらず、選言説の説明の方が、より適切であるという根拠は与えられていないことが明らかになった。また、「脳内の神経活動と知覚的経験との密接な結びつき」を認めることが、「知覚についてのわれわれの日常的な考え」に与える影響を指摘した。その影響を受けた「知覚についてのわれわれの日常的な考え」と選言説との関係や、「選言説が他の知覚の理論より適切であると主張する別の論拠はあるのか」については、今後の課題である。

注

¹ Ayer, A. J. *The Foundations of Empirical Knowledge*. London, Macmillan and Company Limited, 1958. (Ayer, A. J. (神野慧一郎, 中才敏郎, 中谷隆雄 訳) 経験的知識の基礎. 東京, 勁草書房, 1991.) 第1章参照。

² Putnam, H. *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999. (Putnam,

- H. (野本和幸監訳) 心・身体・世界：三つの撚り糸／自然な実在論. 東京, 法政大学出版局, 2005.)
- ³ Martin, M. G. F. The Transparency of Experience. *Mind & Language*, vol. 17, no. 4, September, 2002, p.276-425. Martin, M.G. F. The Limits of Self-Awareness. *Philosophical Studies*. Vol. 120, 2004, p.37-89., Martin, M.G. F. "On Being Alienated". *Perceptual Experience*. Gendler, T. S. ; Hawthorne, J. ed. Oxford, Oxford University Press, 2006, p. 354-410.
- ⁴ Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. Oxford, Oxford University Press, 2009. *Philosophy of Perception: A Contemporary Introduction*. New York and London, Routledge, 2010.
- ⁵ 横山幹子. 選言主義における否定的認識論について. 図書館情報メディア研究2009. vol. 7, no. 2, 2010, p.19-32. 横山幹子. 選言主義、幻覚、区別不可能性：Fish の提案. 図書館情報メディア研究. 2010 vol. 8, no. 2, 2011, p.15-27. 横山幹子. 幻覚の可能性と素朴実在論：Fish と Smith. 図書館情報メディア研究2013. vol. 11, no. 2, 2014, p.23-35. 横山幹子. 幻覚的経験についての否定的認識的考え方. 図書館情報メディア研究2014. vol. 12, no. 2, 2015, p.1-12. これらの論文では、選言説が、知覚的間違い（幻覚や錯覚など）を取り扱うための知覚の理論として、不適切とみなすべき決定的な根拠はないことを論じてきた。また「選言説と非選言説の間の論争について」（横山幹子. 選言説と非選言説の間の論争について. 図書館情報メディア研究2012. vol. 10, no. 2, 2013, p.39-49.）では、「選言説と非選言説をめぐる論争を整理する際に問題になっているのは、幻覚的経験と真正な知覚的経験が質的に同じであるかどうかではない」という Fish の議論の適切性も論じた。しかし、選言説が表象説等、他の非選言説的な知覚の理論と比べてより適切であるという根拠は与えられていない。
- ⁶ その点に関しては、「知覚の志向説と選言説」（小草泰. 知覚の志向説と選言説. 科学哲学. vol. 42, no. 1, 2009, p. 29-49.）や “Naïve Realism and the Explanatory Gap” (Niikawa, T. “Naïve Realism and the Explanatory Gap”, *An Anthology of Philosophical Studies: Volume 8*. Hanna, P. ed. Athens, Atiner, 2014, p. 125-136.) でも興味深いことが述べられている。前者は、選言説が説明したいものは志向説でも説明できるとしており、後者は、オッカムの剃刀の議論等を使うことによって、選言説の主張が、表象説と比べて存在論的に有利であると論じている。
- ⁷ 横山幹子. 「幻覚からの議論」：拡張段階と局所的付随性の原則. 図書館情報メディア研究2015. vol. 13, no. 2, 2016, p.1-13. この論文では、素朴実在論を擁護するために、日常的な考え方を重視したうえで、局所的付随性の原則による「幻覚からの議論」の拡張段階を拒否しようとする Fish の方策には問題点があるということを指摘した。ただし、私は、そのことによって、選言説が不適切であることが決定的に示されたとは考えていない。選言説が適切であるために解決されるべき問題点を提示したと考えている。
- ⁸ Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. Oxford, Oxford University Press, 2009. 選言説の特徴は、真正な知覚的経験と幻覚的経験の間に共通要素を認めないということにあり、その点を共有している選言説にはさまざまなものがある。そして、Fish の選言説がそれらすべての代表になっているわけではない。また、同様に、選言説の適切さについての Fish による議論だけが、選言説が適切であると示そうとしている議論ではない。しかし、本論文では、紙面の都合上、Fish の議論に焦点を当てて考える。もし彼の議論が成功しているなら、共通要素を否定することに問題がないということが示せるだろう。もし彼の議論が失敗しているとしたら、共通要素を否定するための問題点が明らかになる。そして、問題点が明らかになることは、共通要素を否定するための別の議論の手掛かりとなる。
- ⁹ 知覚についてのわれわれの日常的な考えがどのようなものであるか、その考えと知覚的間違いの存在を認めることの矛盾はどこにあるか、その矛盾を選言説がどのように扱うことができるか、等については、一部私自身の先行する論文と重複するところもあるが、議論上必要であるため、必要な範囲で繰り返されている。
- ¹⁰ The Problem of Perception”. Stanford Encyclopedia of Philosophy. <http://plato.stanford.edu/entries/perception-problem/>, (accessed 2016-9-6). 参照。
- ¹¹ The Problem of Perception”. Stanford Encyclopedia of Philosophy. <http://plato.stanford.edu/entries/perception-problem/>, (accessed 2016-9-6). 参照。
- ¹² Snowdon, P. “ How to Interpret ‘ Direct Perception ’ “. Crane, T. ed. *The Contents of Experience*. Cambridge, Cambridge University Press, 1992, p. 68.
- ¹³ Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. p. 31.
- ¹⁴ Hinton, J. M. *Experiences*. Oxford, Oxford University Press, 1973.

- ¹⁵ Martin, M. G. F. *The Transparency of Experience*. p. 378.
- ¹⁶ Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. p. 36–37.
- ¹⁷ Fish, W. *Philosophy of Perception: A Contemporary Introduction*. New York and London, Routledge, 2010. (Fish, W. (山田圭一監訳) 知覚の哲学入門. 東京, 勁草書房, 2014.)
- ¹⁸ Robinson, H. *Perception*. London and New York, Routledge, 1994, p. 32.
- ¹⁹ Fish は、表象原理を認める知覚の理論を総体として志向説と呼び、知覚の志向説の一部が表象説であるとしている。ただし、Stanford Encyclopedia of Philosophy の “Representational Theories of Consciousness”. Stanford Encyclopedia of Philosophy <http://plato.stanford.edu/entries/consciousness-representational/> (accessed 2016-9-6) では、表象原理を認める知覚の理論の総体を表象説と呼んでいる。本論では、Fish の “Philosophy of Perception: A Contemporary Introduction” でのまとめ方を利用している一方で、表象説を広義に使っている。
- ²⁰ Harman, G. “The Intrinsic Quality of Experience”. Tomberlin, J. ed. *Philosophical Perspectives 4: Action Theory and Philosophy of Mind*, Atascadero, California: Ridgeview Publishing Company, 1990, p. 35. (Harman, G. (鈴木貴之訳) “経験の内在的性質”. シリーズ心の哲学Ⅲ翻訳篇. 信原幸弘編. 東京, 勁草書房, 2004, p. 85–120.)
- ²¹ 村上郁也. イラストレクチャー認知神経科学：心理学と脳科学が解くところの仕組み. 東京, オーム社, 2010.
- ²² *Ibid.* p. iii.
- ²³ *Ibid.* p.54.
- ²⁴ “知覚”. 認知科学辞典. 第1版, 東京, 共立出版株式会社, 2002, p.541.
- ²⁵ Koch, C. *The Quest for Consciousness: A Neurobiological Approach*. Englewood, Colorado, Roberts and Company Publishers, 2004, p. 332. (Koch, C. (土屋尚嗣, 金井良太 訳) 意識の探求：神経科学からのアプローチ (上), 東京, 岩波書店, 2006. および Koch, C. (土屋尚嗣, 金井良太訳) 意識の探求：神経科学からのアプローチ (下), 東京, 岩波書店, 2006.)
- ²⁶ 大山正, 今井省吾, 和気典二編. 新編 感覚・知覚心理学ハンドブック. 東京, 誠信書房, 1994, p.303.
- ²⁷ “知覚内容”. 認知科学辞典. 第1版, 東京, 共立出版株式会社, 2002, p.544.
- ²⁸ “表象説”. 認知科学辞典. 第1版, 東京, 共立出版株式会社, 2002, p.544.
- ²⁹ 村上郁也. イラストレクチャー認知神経科学：心理学と脳科学が解くところの仕組み. p. 54.
- ³⁰ Koch, C. *The Quest for Consciousness: A Neurobiological Approach*. p.333.
- ³¹ もちろん、問題はそれほど簡単ではない。相関関係があるだけでは、意識のハード・プロブレム (なぜ、物質的な状態からクオリア (感覚質) が生じるのかという問題) は解けないと考えることもできる。ただし、Koch は、NCC を見つけるというイージー・プロブレムが解決できれば、ハード・プロブレムは消えると考えている。さまざまな議論に関しては、たとえば、鈴木貴之. ぼくらが原子の集まりなら、なぜ痛みや悲しみを感じるのだろうか：意識のハード・プロブレムに挑む. 東京, 勁草書房, 2015. 参照。
- ³² この議論の適切性については、以前検討した。横山幹子. 「幻覚からの議論」：拡張段階と局所的付随性の原則. 参照。
- ³³ Maund, B. *Perception*. Chesham, Acumen Publishing Limited, 2003, p. 119.
- ³⁴ Zeki, S. A Century of Cerebral Achromatopsia. *Brain*. Vol. 113, 1990, p.1721–1777., Zeki, S. Cerebral Akinetopsia (Visual Motion Blindness): A Review. *Brain*. Vol. 114, 1991, p.811–824. 参照。
- ³⁵ たとえば、Koch, C. *The Quest for Consciousness: A Neurobiological Approach*. 参照。
- ³⁶ Robinson, H. *Perception*. London and New York, Routledge, 1994. p.70.
- ³⁷ Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. p. 137.
- ³⁸ Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. p. 137.
- ³⁹ 森田ひろみ・森田昌彦. 形と色の統合における局所結合の働き. 心理学研究. vol. 69, no. 5, 1998, p. 358–366.
- ⁴⁰ 『新・心の哲学Ⅱ：意識編』の「意識経験の構造を探る：現象的統一性と因果的統合性」(太田紘史. 意識経験の構造を探る：現象的統一性と因果的統合性, 新・心の哲学Ⅱ：意識編, 信原幸弘・太田紘史編, 東京, 勁草書房, 2014, 179–223.) で言われているように、意識をめぐる統一性の概念は、認知科学で扱われるような「対象的統一性」だけではないだろう。しかし、Fish が念頭に置いていたものがまずは「対象統一性」であったために、ここではその問題について論じて

いる。意識経験の統一性一般についての考察は別の機会に譲りたい。

⁴¹ “知覚”. 認知科学辞典. 第1版, 東京, 共立出版株式会社, 2002, p.541.

参考文献

- Ayer, A. J. *The Foundations of Empirical Knowledge*. London, Macmillan and Company Limited, 1958. (Ayer, A. J. (神野慧一郎, 中才敏郎, 中谷隆雄 訳) 経験的知識の基礎. 東京, 勁草書房, 1991.)
- Crane, T. ed. *The Contents of Experience*. Cambridge, Cambridge University Press, 1992. London, Routledge, 2000.
- Fish, W. *Perception, Hallucination, and Illusion*. Oxford, Oxford University Press, 2009.
- Fish, W. *Philosophy of Perception: A Contemporary Introduction*. New York and London, Routledge, 2010. (Fish, W. (山田圭一 監訳) 知覚の哲学入門. 東京, 勁草書房, 2014.)
- Gendler, T. S.; Hawthorne, J. ed. *Perceptual Experience*. Oxford, Oxford University Press, 2006.
- Hanna, P. ed. *An Anthology of Philosophical Studies: Volume 8*, Athens, Atiner, 2014.
- Harman, G. “The Intrinsic Quality of Experience”. Tomberlin, J. ed. *Philosophical Perspectives 4: Action Theory and Philosophy of Mind*, Atascadero, California: Ridgeview Publishing Company, 1990, p. 31-52. (Harman, G. (鈴木貴之 訳) “経験の内在的性質”, シリーズ心の哲学Ⅲ 翻訳篇. 信原幸弘編. 東京, 勁草書房, 2004, p. 85-120.)
- Hinton, J. M. *Experiences*. Oxford, Oxford University Press, 1973.
- Koch, C. *The Quest for Consciousness: A Neurobiological Approach*. Englewood, Colorado, Roberts and Company Publishers, 2004. (Koch, C. (土屋尚嗣, 金井良太 訳) 意識の探求: 神経科学からのアプローチ (上), 東京, 岩波書店, 2006. および Koch, C. (土屋尚嗣, 金井良太 訳) 意識の探求: 神経科学からのアプローチ (下), 東京, 岩波書店, 2006.)
- Martin, M. G. F. *The Transparency of Experience*. *Mind & Language*, vol. 17, no. 4, September, 2002, p.276-425.
- Martin, M.G. F. *The Limits of Self-Awareness*. *Philosophical Studies*. Vol. 120, 2004, p.37-89.
- Martin, M.G. F. “On Being Alienated”. *Perceptual Experience*. Gendler, T. S.; Hawthorne, J. ed. Oxford, Oxford University Press, 2006, p. 354-410.
- Maund, B. *Perception*. Chesham, Acumen Publishing Limited, 2003.
- 日本認知科学会編. 認知科学辞典. 第1版, 東京, 共立出版株式会社, 2002.
- Niikawa, T. “Naïve Realism and the Explanatory Gap”, *An Anthology of Philosophical Studies: Volume 8*. Hanna, P. ed. Athens, Atiner, 2014, p. 125-136.
- 信原幸弘・太田紘史編. 新・心の哲学Ⅱ: 意識編, 東京, 勁草書房, 2014.
- 小草泰. 知覚の志向説と選言説. *科学哲学*. vol. 42, no. 1, 2009, p. 29-49.
- 太田紘史. 意識経験の構造を探る: 現象的統一性と因果的統合性. 新・心の哲学Ⅱ: 意識編, 信原幸弘・太田紘史編, 東京, 勁草書房, 2014, 179-223.
- 大山正, 今井省吾, 和気典二編. 新編 感覚・知覚心理学ハンドブック. 東京, 誠信書房, 1994.
- Putnam, H. *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999. (Putnam, H. (野本和幸 監訳) 心・身体・世界: 三つの撚り糸/自然な実在論. 東京, 法政大学出版局, 2005.)
- Robinson, H. *Perception*. London and New York, Routledge, 1994.
- Snowdon, P. “How to interpret ‘direct perception’”. Crane, T. ed. *The Contents of Experience*. Cambridge, Cambridge University Press, 1992, p. 48-78.
- 鈴木貴之. ほくらが原子の集まりなら、なぜ痛みや悲しみを感じるのだろうか: 意識のハード・プロブレムに挑む. 東京, 勁草書房, 2015.
- 横山幹子. 選言主義における否定的認識論について. *図書館情報メディア研究*2009. vol. 7, no. 2, 2010, p.19-32.
- 横山幹子. 選言主義、幻覚、区別不可能性: Fish の提案. *図書館情報メディア研究*. 2010 vol. 8, no. 2, 2011, p.15-27.
- 横山幹子. 選言説と非選言説の間の論争について. *図書館情報メディア研究*2012. vol. 10, no. 2, 2013, p.39-49.
- 横山幹子. 幻覚の可能性と素朴実在論: Fish と Smith. *図書館情報メディア研究*2013. vol. 11, no. 2, 2014, p.23-35.

横山幹子. 幻覚的経験についての否定的認識的考
方. 図書館情報メディア研究2014. vol. 12, no. 2,
2015, p.1-12.

横山幹子. 「幻覚からの議論」: 拡張段階と局所的付随性
の原則. 図書館情報メディア研究2015. vol. 13, no. 2,
2016, p.1-13.

Zeki, S. A Century of Cerebral Achromatopsia. Brain. Vol.
113, 1990, p.1721-1777.

Zeki, S. Cerebral Akinetopsia (Visual Motion Blindness):
A Review. Brain. Vol. 114, 1991, p.811-824.

“The Problem of Perception”. Stanford Encyclopedia
of Philosophy. [http://plato.stanford.edu/entries/
perception-problem/](http://plato.stanford.edu/entries/perception-problem/), (accessed 2016-9-6).

”Representational Theories of Consciousness”. Stanford
Encyclopedia of Philosophy [http://plato.stanford.
edu/entries/consciousness-representational/](http://plato.stanford.edu/entries/consciousness-representational/),
(accessed 2016-9-6).

(平成28年 9 月29日 受付)

(平成29年 1 月25日 採録)